



TITLE:

死と自我解放 : Stendhal, Armance論

AUTHOR(S):

今井, 雅彦

CITATION:

今井, 雅彦. 死と自我解放 : Stendhal, Armance論. 仏文研究 1982, 11: 43-73

ISSUE DATE:

1982-01-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/137660>

RIGHT:

死 と 自 我 解 放

— Stendhal, *Armance* 論 —

今 井 雅 彦

序

H. Martineau は、Stendhal が *Armance* ¹⁾ (1826 年執筆, 1827 年出版) において主人公 Octave の「秘密について絶えず語りながら、決してそれを暴露しようとし²⁾ない」ため、この作品の成立事情を知り、また 1826 年 12 月 23 日付の Mérimée 宛の書簡³⁾の助けを借りることによって、つまりテキスト外の資料によって初めて読者は Octave の秘密が何であるのかを知るのだという。そして、「現代では不可欠なものとなっている説明が Stendhal の同時代人にさえ全然なされなかった⁴⁾」ため、Martineau は序文の必要性を説くのである。⁵⁾

Jamais livre n'eut plus besoin de préface. On ne le comprend pas sans explication.

だが、Octave の秘密は果してテキストの内において読解不可能なのだろうか。*Armance* と結婚せざるを得ない状況に追い込まれた Octave は結婚を回避するため、彼女に向かい自分は「monstre」なのだと告白する。⁶⁾

[...] mais quel est l'homme qui t'adore ? C'est un *monstre*. (イタリック作者)

確かに作者は Octave の impuissance をそうとは言わないのだが、「monstre」という言葉が用いられている状況を考慮に入れるならば、この言葉の意味は明らかではなく、従って上の Martineau の見解には同意し難い。ともかく、この作品のテーマとして、性的不能者でありながら恋に陥る Octave という逆説、Octave の性格分析、また、1826 年当時の風俗描写の三点を挙げることに⁷⁾ Martineau はこの作品の持つテーマの多様性を指摘しているのである。あるいは、*Armance* は「生理学、精神医学の症例を好奇心に富んだ人の目に提示することが、問題なのではない⁸⁾」と言い、J. Prévost はこの作品の真のテーマについて次のように語

る。⁹⁾

Il s'agit de juger la société, le monde, et le bonheur par les yeux d'un être qui se croit séparé sans retour du monde et du bonheur, d'un moine malgré lui, cloîtré au milieu des hommes par son corps imparfait.

続いて、作者は Octave を通して「諸々の事柄の総体への新たな視点」*« une nouvelle vue sur l'ensemble des choses¹⁰⁾ »* を提示しているのだと彼は言う。このように語る時、Prévost はこの作品の多様なテーマを要約していると言えるのである。H.-F. Imbert にならい、次の三つのテーマにまとめることができる。すなわち、「生理学的症例、恋愛悲劇、上流階級の描写¹¹⁾」(Prévost は症例の重要性は否定しつつも、その存在は認めているのである)。そして、諸研究者は、テーマの多様性に注目しつつ、各々一つの側面に力点を置くことによってこの作品の解釈を試みている。例えば、A. Hoog は「性的不能は小説の登場人物 (= Octave) の秘密ばかりでなく、小説家の秘密を語る¹²⁾」とか *« Octave, le plus secret Octave, c'est Henri Beyle¹³⁾ »* と規定し、Octave の性的不能は Stendhal の *identité* を反映するという観点のもとに「症例」の面に焦点を当てる。あるいは、テーマの多様性にかんがみて、*Armance* を「その政治的観点から考察すれば議論の余地のない統一性を得るだろう¹⁴⁾」と規定することにより、Imbert や Bardèche¹⁵⁾ は上流階級の描写、つまり政治的歴史的側面に焦点を当てる。このように、政治的歴史的観点から議論を展開する研究者に特徴的なことは、Imbert の例を挙げるなら、Octave あるいは彼の肉体的欠陥は王政復古期における「衰退しつつある階級の象徴¹⁶⁾」であり、彼の死は「彼の愛の不可能性と彼の政治的存在の空しさ¹⁷⁾」の象徴と考えることである。

これらに対し、私は恋愛悲劇という心理的側面に焦点を合わせ、次のような観点からこの作品の読解を進めて行こう。Octave と「世界¹⁸⁾」は相入れない関係にあり、そのため彼は自分自身の世界の内に自己を閉込めている。この閉込められた Octave の自我が *Armance* との恋愛により解放され、その死において幸福へと至る過程がこの作品の中心を形成する。以下において、テキストに即しつつ、まず、Octave と世界の間関係を確定する。次に、Octave が *Armance* を通じて世界へ向けて自我を解放するに至る過程をたどることとする。なお、この Octave の自我解放の過程は、彼と *Armance* の恋愛の完成の過程、つまり、性的不能者でありながら恋に陥るという Octave の逆説の成立過程である。また、Octave の目を通して

の「社会、社交界、幸福の批判¹⁹⁾」と言うことにより、Prévost は Octave と世界の相入れない関係を意味しているのだが、この過程は、Octave が世界との関係を克服する過程でもある。そして、Octave が死において幸福へと至ると述べたように、結論において、Octave の死と幸福の意味を、また、幸福の観点から Octave と Stendhal の identité の問題を考察する。

第一章 Octave における singularity の問題

Octave はその性格の故に世界から敵対視され、あるいは拒否されていると考える。例えば、気性の激しい性格の故に理工科学校では皆から «complètement fou²⁰⁾» と思われていたため、喧嘩をしても刃物沙汰には至らないほど敬遠されていた。あるいは、社交界では「特殊な人間」«un être à part²¹⁾» 扱いされる。そして、Octave は友人達から悪魔のように思われ除け者にされてゆくさまを Ar-mance に次のように語る。²²⁾

Bientôt après la première connaissance, il n'en est aucun que mes discours n'étrangent de moi. Quand enfin du bout d'un an, et malgré moi, ils (=mes amis) me comprennent tout à fait, ils s'enveloppent dans la réserve la plus sévère et aimeraient mieux, je crois, que leurs actions et leurs pensées intimes fussent connues du diable que de moi. Je ne voudrais pas jurer que plusieurs ne me prennent pour *Lucifer lui-même* [...] incarné tout exprès pour leur mettre martel en tête. (イタリック作者)

一方、Octave もまたそのような世界に対し、「およそ人生の現実的な事柄一切に對しまったく興味を示さない²³⁾」というように心を閉ざしてしまう。あるいは、世界を拒絶する Octave を彼の母の目を通し作者は次のように描く。²⁴⁾

Elle observait constamment que la vie réelle, loin d'être une source d'émotions pour son fils (=Octave), n'avait d'autre effet que de l'impatienter.

世界から拒否されていると考え、同時に世界に対し心を閉ざし、世界を拒否するという、このような Octave と世界の関係のあり方を示すものとして、形容詞 *singulier* あるいはその同義の形容詞 (*mystérieux*, *étrange*, *original* 等々)、名詞が

Octave に付与されるのである。実際、彼のあらゆる面 — 「対人関係²⁵⁾」, 「性格²⁶⁾」, 「行動のあり方²⁷⁾」, 「考え方²⁸⁾」, 「趣味²⁹⁾」, 「夢想³⁰⁾」, 「感受性³¹⁾」, 「生き方³²⁾」 — が *singulier* と形容され, 「存在³³⁾」 そのものも *singulier* と呼ばれ, 彼自身自己の *singularité* を自覚する。³⁴⁾ 従って, 「Octave の *singularité* は人をより不安にさせる。それは(……)生理的に異常な条件(= 性的不能)によって説明される³⁵⁾」と, Octave の *singularité* を彼の性的不能に関連づけることに重要性を置きながらも(また, 私とは異なる観点から作品解釈をしながらも), Octave の *singularité* について次のよう言う Imbert は的を得ているであろう。³⁶⁾

C'est à la fois au sein de lui-même et dans ses rapports avec les autres qu'Octave se découvre singulier.

このように, すべて不可解さにおおわれ, 「変人」*«un original³⁷⁾»* 扱われ, 「まるで特別の人間のように他人から離れて生き³⁸⁾」, 同時に他者を拒絶し, Octave は自分自身の世界に閉込もる。が, 彼の生活は「自分自身の周囲に展開する現実生活のできごととは食い違う³⁹⁾」原則に支配されており, 現実と相入れないものであるため, Octave と世界の間には常に葛藤が繰り返される。そのため彼自身不幸であることを自覚する。ある社交界の帰, 深い絶望に抱えられて帰宅した Octave は不幸を嘆く。⁴⁰⁾

[...] J'ai beau faire les plans de conduite les plus raisonnables en apparence, ma vie n'est qu'une suite de malheurs et de sensations amères.

そして, ピストルの入ったケースを開け, 「死ぬなんて本当は大したことはないのだ⁴¹⁾」と死の願望を口にするまでに至る。従って, 不幸を逃れるために, 自殺願望の他に, 僧職に就き「世間から身を引き, 神に一生をささげたい⁴²⁾」とか, 「世間から隠遁した学者⁴³⁾」になりたいという願望を Octave は抱くのである。

第二章 Octave の自我解放の過程

Armance もまた Octave と同様に *singulière* と形容され,⁴⁴⁾ Octave の母親に

二人は地上に追放された天使にたとえられる。⁴⁵⁾

C'est ainsi [...] que deux anges exilés parmi les hommes, et obligés de se cacher sous des formes mortelles, se regarderaient entre eux pour se reconnaître. (イタリック筆者)

このように、両者のもつ *singularité* は栗須公正氏の指摘するように、この作品において「共鳴し合う人物の一つの共同体を形成する役割を果している⁴⁶⁾」のである。さらに氏は続いて言う。⁴⁷⁾

La singularité remarquée dans le héros et l'héroïne démontre par son analogie le dédoublement de ces deux personnages.

この指摘により、Octave と Armance の関係が、つまり互いが互いの分身であるという性格が理解できるであろう(但し、後述するが、Armance は「Octave の女性の分身⁴⁸⁾」の性格の方がより強いと思われる)。この Armance による世界と相入れない関係にある Octave の自我解放の過程、すなわち、Octave が世界と自己との間に築いた «un mur de diamant⁴⁹⁾» を Armance が「消滅させる⁵⁰⁾」過程、これは四段階に分けることができる。既に述べたように、Octave の自我解放の過程は彼と Armance との恋愛の成立過程でもあるから、それに沿って論を進めてゆこう。

(1) Armance との恋愛の可能性(第Ⅲ章 — 第Ⅴ章)

Armance がその庇護のもとにある Bonnivet 夫人の催した舞踏会を途中で逃げ出した Octave は、兵士達との喧嘩で傷を負い、翌朝「奇妙な状態⁵¹⁾」で帰宅する。見舞に来た Armance に向かい Octave は自分の孤独、不幸などの愚痴をこぼす。同時に、不平に耳を傾ける彼女に対し、Octave の「まなざし」が語りかけるのは愛の可能性である。⁵²⁾

[...] les yeux d'Octave exprimaient tant de possibilité d'aimer et quelquefois ils étaient si tendres !

象徴的なのはこの Octave のまなざしの表現であろう。なぜなら、彼にとって愛情

は嫌悪の対象に他ならないからである。⁵³⁾

Il était bien loin de songer à aimer, il avait ce sentiment en horreur.

このような時、亡命貴族に対する賠償法の成立が確実となり、財産がころがり込むこととなった Octave は一躍社交界の寵児となる。が、彼は、「あれほど立派な心の持主だと思っていたのに二百万フランのあてができてから、すっかり気が顛倒している⁵⁴⁾」と Armance に言われ、彼女の不興を被る。衝撃を受けた Octave にとって、「Armance の尊敬を取り戻すこと⁵⁵⁾」が彼の「唯一の関心事⁵⁶⁾」となる。不興を被るという「この現実の不幸⁵⁷⁾」により、Octave 自身、及び彼と世界の関係のあり方にわずかながら変化が生じる。彼は「いつもの憂鬱から気がまぎれ⁵⁸⁾」、現実に対する批判的態度という彼自身の「習慣⁵⁹⁾」を忘れ、そして、従来のように人生への嫌悪をかきたてられることがなくなる。⁶⁰⁾

[...] mais ces malheurs [...] n'allaient point jusqu'à lui inspirer ce profond dégoût pour la vie qu'il éprouvait autrefois.

むしろ、彼の目は Armance へと向けられ、不興は幸福に立ちはだかる障害であり、彼女の尊敬を取り戻すという新たな人生の目標が彼の内に生まれる。⁶¹⁾

Octave voyait un obstacle qui le séparait du bonheur, mais il voyait le bonheur [...] Sa vie eut un but nouveau, il désirait passionnément reconquérir l'estime d'Armance.

かくして、「愛してはならないと幾度となく誓った⁶²⁾」Octave は弁明の機会を求めて Bonnivet 夫人の salon へ足繁く通うのであるが、彼自身意識しないうちに、単なる «un ami⁶³⁾» としてしかみていなかった Armance に次第に心ひかれてゆくのである。以上において、Octave と Armance との恋愛の可能性が示された。同時に、Octave が Armance から被った不興を「現実の不幸」と意識したように、Armance を通して、彼と世界の関係の可能性が示されたと言えるであろう。

(2) Armance との恋愛の開始 (第 VI 章 — 第 XIV 章)

偶然、Armance と語り合える機会を得た Octave は弁明し、彼女の一言が自分

の一生を決定したといい、次のように言う。⁶⁴⁾

Ce mot a disposé de ma vie; depuis ce moment je n'ai pensé qu'à regagner votre estime.

釈明に耳を傾け、納得したか否かの返答を迫られた Armance は「*Vous avez toute mon estime*⁶⁵⁾」とだけ言い彼のもとを去る。この会話は互いの愛の告白となっているのだが、Armance のみが Octave への愛情を — 彼女はそれを「*mon fatal secret*⁶⁶⁾」「*mon fatal amour*⁶⁷⁾」「*cette passion affreuse*⁶⁸⁾」と呼ぶ — 意識しており、ただ、彼女はそれを「はっきりと告白しなかった⁶⁹⁾」にすぎないのである。一方、Octave は釈明が成功したか否かは分らず、Armance の言葉を聞き「喜んで良いか悲しんで良いかも分らない⁷⁰⁾」ままであり、まして、魂の奥底で Armance を愛していることは彼には考えつかないことであり、彼女とは対照的である。⁷¹⁾

Ce qui est admirable, c'est que notre philosophe (=Octave) n'eut pas la moindre idée qu'il aimait Armance d'amour.

が、ともかく和解により、Octave にとって「新たな生き方」*«une nouvelle manière d'être»*⁷²⁾ が始まり、彼と Armance との間には「とても奇妙な親密さ」*«une intimité fort singulière»*⁷³⁾ ができあがり、二人はその幸福に浸る — Armance は Octave を愛することの幸福に酔い、一方、Octave は自分の幸福はあくまでも Armance との *«amitié»*⁷⁴⁾ のたまものと考える点において彼等の関係は奇妙なのである。このように意識の面において対照的でありながら、幸福に酔う二人を作者は次のように描く。⁷⁵⁾

Il était heureux en dépit de lui-même; et dans ces moments rien aussi ne manquait au bonheur d'Armance. [...] Elle veillait bien sur ses paroles, et jamais ses paroles n'exprimaient autre chose que la plus sainte amitié. Mais le ton dont certains mots étaient dits! les regards qui quelquefois les accompagnaient! tout autre qu'Octave eût su y voir l'expression de la passion la plus vive. Il en jouissait sans les comprendre.

そして、「その魂が Armance の与える幸福により魅惑されている⁷⁶⁾」 Octave

自身、及び彼と世界の関係に変化が生じる。彼は性格を変えられるのではないかと思う。⁷⁷⁾

Le bonheur tranquille et parfait dont le pénétrait la douce amitié d'Armance, fut si vivement senti par lui qu'il espéra de changer de caractère.

また、死にたいと思われる程の深い「絶望の時」《des moments de désespoir⁷⁸⁾》に陥ることはなくなり、以前は気が狂ったのではないかと人を不安にさせた「あの怒りの発作」《ces accès de fureur⁷⁹⁾》も止むのである。次に、Octaveの視線は外部へと向けられる。社交界という閉ざされた狭い世界の内においてさえも、従来心を打たれなかった多くの事柄を発見し、彼は驚く。⁸⁰⁾

Il s'étonnait de voir dans la société bien des choses qui ne l'avaient jamais frappé auparavant, quoique depuis longtemps elles fussent sous ses yeux.

また、世界はかつて思っていた程憎むべきものでもないし、彼に敵対していないことを知るに至る。⁸¹⁾

Le monde lui semblait moins haïssable et surtout moins occupé de lui nuire. Il se disait que [...] chacun songeait beaucoup plus à soi, et beaucoup moins à nuire au voisin qu'il n'avait cru l'apercevoir autrefois. [...] il s'aperçut enfin que ce monde qu'il avait eu le fol orgueil de croire arrangé d'une manière hostile pour lui, n'était tout simplement que mal arrangé.

(イタリック作者、下線筆者)

ここにおいて、singulier と形容された Octave と世界の関係のあり方が、事実の問題ではなく、彼の意識のレベルの問題であることが明確となったのである。そして、Armance の与える幸福により「陰気な人間嫌いはしばしば和らげられ⁸²⁾」、Octave は他者に対してばかりでなく自分自身に対しても「公正で寛容⁸³⁾」となり、時には、「社交界の内に Armance の与える幸福な気分をすべて持込む⁸⁴⁾」ほどになる。Octave の変容を評して作者は「彼はより幸福になり、より才知がさえた⁸⁵⁾」と言うのだが、これは、かつての不幸な彼とは対照的に、Octave が Armance との恋愛により世界と自己との間に築いていた壁を崩し始め、Armance を通して世

界に向けて心を開き始めたこと、世界への指向を開始したことを意味している。また、このことは従来の Octave と世界の関係のあり方を示すものとして付与されていた *singularité* が解消されてゆくことを意味している。しかしながら、いまだ世界に対し完全には心を開いていない Octave は時折 *singulier* と形容されるだろう。しかも、彼の *singularité* は彼の死の直前まで消滅することはないのである。実際、Armance と和解した Octave が世界に対する態度を変え始める第Ⅱ章以降、彼に付与される *singularité* の数が減少してゆくのだが、この事実は既に挙げた栗須公正氏の論文において統計的に論証されているのである。⁸⁶⁾

(3) Armance への愛の自覚、愛の告白（第Ⅳ章 — 第ⅣⅣ章）

Octave がそうとは意識しないままに Armance に寄せる恋愛感情の幸福感に身をゆだねる時、そこに自然の力が関与する。「焼けつくように暑い一日」*« une journée d'une accablante chaleur⁸⁷⁾ »* の暮れたある晩、Andilly の丘を囲む「美しい栗の木立」*« les jolis bosquets de châtaigniers⁸⁸⁾ »* の間を「心地よい微風」*« une brise douce⁸⁹⁾ »* が吹きぬけるなか「ゆっくりと」*« lentement⁹⁰⁾ »* 散歩する時、Octave と Armance は恍惚状態に陥る。⁹¹⁾

Il y avait dans l'accent profond et presque attendri avec lequel Octave disait ces vaines paroles [...] un dévouement si passionné pour l'amie (=Armance) à laquelle il se confiait qu'elle n'eut pas le courage de résister au bonheur de se voir aimée ainsi. Elle s'appuyait sur le bras d'Octave et l'écoutait comme ravie en extase [...] le son de sa voix eût fait connaître à son cousin (=Octave) toute la passion qu'il inspirait. Le bruissement léger des feuilles, agitées par le vent du soir, semblait prêter un nouveau charme à leur silence. Octave regardait les grands yeux d'Armance qui se fixaient sur les siens. [...] On vous appelle, dit Armance, et le ton de voix brisé avec lequel elle dit ces mots si simples, eût appris à tout autre qu'Octave l'amour qu'on avait pour lui. Mais il était si étonné de ce qui se passait dans son cœur, si troublé par le beau bras d'Armance à peine voilé d'une gaze légère [...] qu'il n'avait d'attention à rien. Il était hors de lui, il goûtait les plaisirs de l'amour le plus heureux, et se l'avouait presque. [...] il regardait ses yeux [...] Il se sentait entraîné, il ne raisonnait plus, il était au comble du bonheur. (イタリック筆者)

ここにおいて、作者は Armance の extase と共に、Octave と自然、及び傍にいる Armance の Octave への愛情と、Octave の Armance への愛情を通し、彼女をも含めた自然との融合による Octave の extase を記述している。そして、Armance と Octave を extase に導いているのは自然ばかりでなく、二人の交わす言葉ではなく言葉の抑揚、声の調子、まなざし、あるいは、Armance の官能性なのである。

この直後、Octave は、Armance を愛しているのだと d'Aumale 夫人から指摘され、初めて「自分の心の真の状態⁹²⁾」を知り絶望に陥る。愛してはならないという誓いを自ら破った Octave は世界に対して開きかけていた心を再び閉ざしてしまう。⁹³⁾ そして、彼自身 Armance を愛していること、彼女から愛されていることを認識した時、ギリシア旅行を口実にして Armance のもとを去り、二度と会わぬ決心をする。

しかし、ギリシア旅行の直前、Octave はささいなことで決闘をし、瀕死の重傷を負う。彼はそのまま死ぬことを願い、Armance の名を口にし、彼女を想い浮かべることに幸福を見出す。⁹⁴⁾

Nommer Armance fit une révolution dans la situation d'Octave. [...] Cet instant fut rempli de délices. [...] Ah ! si j'allais mourir, se dit-il avec joie, et il se permit de penser à Armance.

(死の願望と Armance を想うことが joie という点において等価である。)
そして、医者から死の確実さを宣告され、Octave は初めて自分の意志でもって、Armance に愛を告白し、その幸福を享受する。⁹⁵⁾

Chère Armance, dit-il, je vais mourir; ce moment a quelques privilèges [...] je meurs comme j'ai vécu, en vous aimant avec passion; et la mort m'est douce, parce qu'elle me permet de vous faire cet aveu.

(来たるべき死と愛の告白が幸福という点において等価である。) 死に向かって歩む間(そのように彼は信じている)、Octave は幸福な時間を生きる。また、死の切迫がその機会を与えた愛の告白により、以前にもまして心を開き、彼は自分の一生について「筋の通った」《raisonnable⁹⁶⁾》判断を下せるようになる。そのうえ、愛の禁止を破った自分自身を許そうという気になる。

が、意に反して生命力を回復した Octave は「困惑し」《embarrassé⁹⁷⁾》、「驚き」《étonnement⁹⁸⁾》に扱えられるが、葛藤の後に彼は生きることを受け入れる。なぜなら、Armance に心情を吐露する幸福は、従来の彼と世界との関係を一変してしまうと思われるほどの至福だからである。⁹⁹⁾

Mais le bonheur de tout dire à mademoiselle de Zohiloff (=Armance) [...] formait pour cet être, qui de la vie ne s'était confié à personne, *un état de félicité* tellement au-dessus de tout ce qu'il avait pensé, qu'il *n'eut jamais l'idée sérieuse de reprendre ses préjugés et sa tristesse d'autrefois.* (イタリック筆者)

傷の癒えた Octave と Armance の間に「幸福な時」《le temps du bonheur¹⁰⁰⁾》が訪れ、その間二人は「おそらく恋の最も甘美な魅力をなすあの限りない信頼¹⁰¹⁾」を持つに至り、両者の間に一種の透明な空間、魂の共鳴、《comme une sorte d'écho qui, sans rien exprimer bien directement, semblait parler d'amitié parfaite et de sympathie sans bornes¹⁰²⁾》、すなわち、「会話でも対話でもない自発的な伝達¹⁰³⁾」が生まれる。この共鳴関係のなかで、Armance を眼前にした Octave は沈黙の内で至福に身を任せる。¹⁰⁴⁾

Il y eut des soirées où *Octave se livra au suprême bonheur de ne pas parler, et de voir Armance agir sous ses yeux.* Ces moments ne furent perdus [...] ni pour Armance, ravie de voir l'homme qu'elle adorait s'occuper d'elle uniquement. (イタリック筆者)

この至福は Octave が心を開き Armance の世界と融合したことによる至福である。なお、この Octave の幸福の意識は Armance と和解した時の幸福、Andilly の森で体験した extase と同一のものであるが、彼が Armance への愛を自覚し、また告白したという点において、この至福の意識がさらに密度を増しているのは言うまでもないであろう。また、このことは Octave が従来以上に Armance 及び Armance を通して世界に魂を開いていること、彼と世界の関係が従来よりも改善されたことを意味しているのである。

(4) Armance との婚約、結婚、Octave の死(第 XXV 章 — 第 XXXI 章)

Octave との密通の疑いをかけられ危機に陥った Armance を救うため、彼女との結婚に同意して以来、彼は憂鬱の発作 — «des accès d'humeur noire¹⁰⁵⁾» «ces accès d'humeur sombre¹⁰⁶⁾» — に襲われ、Armance にはそれが不吉に思われる。Armance にその理由を問い詰められた Octave は、自分の秘密を告白しようとするが果せない。¹⁰⁷⁾

— Je vous parlerai comme à moi-même, dit Octave avec impétuosité. Il y a des moments où je suis beaucoup plus heureux, car enfin j'ai la certitude que rien au monde ne pourrait me séparer de vous; *mais*, ajouta-t-il ... et il tomba dans un de ces moments de silence sombre qui faisaient le désespoir d'Armance. [...] — Mais quoi, cher ami ? lui dit-elle, dites-moi tout; ce *mais* affreux va me rendre cent fois plus malheureuse que tout ce que vous pourriez ajouter. — En bien ! dit Octave [...] vous saurez tout [...] Ai-je besoin de vous jurer que je vous aime uniquement au monde, comme jamais je n'ai aimé, comme jamais je n'aimerai ? Mais j'ai un secret affreux que jamais je n'ai confié à personne, ce secret va vous expliquer mes fatales bizarreries. (イタリック作者, 下線筆者)

さらに話すように促された Octave は自分は «monstre» なのだという。¹⁰⁸⁾

[...] quel est l'homme qui t'adore ? C'est un *monstre*. (イタリック作者)

しかし、Armance にはその意味は通じない。また、彼は手紙でもって告白しようとするが、偽手紙事件¹⁰⁹⁾によりできずじまいになる。結局、Octave のすべてが語られるには、その機会をおのれの死の内に求めねばならない。秘密の告白が失敗に終り、心ならずも結婚した Octave は新婚旅行の途中 Armance と別れ、ギリシアに向う船上で自殺する。それは決闘で死にそこなった死を再び自殺という形式により完全な形で生きることでもある。死は Octave にとって、文字通り「最後の瞬間」であると同時に「至高の瞬間」でもある。この瞬間において、彼は「すべて」を手紙に託して Armance に語り、また、彼女に寄せる愛情の最高の幸福感（死の瞬間において Octave と Armance の恋愛が完成されたことを意味する）に身をゆだねる。¹¹⁰⁾

Jamais Octave n'avait été sous le charme de l'amour le plus tendre comme dans *ce moment suprême*. Excepté le genre de sa mort, *il s'accorda le bonheur de tout dire à son Armance.* (イタリック筆者)

le bonheur と tout dire が等価に置かれているように、死の瞬間において Octave と Armance の間には初めて、《Sans feinte aucune¹¹¹⁾》とまでは言えないにせよ — なぜなら Octave は自殺については沈黙を守ったのだから — 少なくとも、《la transparence enfin trouvée¹¹²⁾》という状態が実現したのである。そして、「すべて」とは Armance への愛情ばかりでなく、告白できなかった秘密を含めた「すべて」なのであり、Octave の幸福は死の瞬間に初めて自らの意志でもって、Armance , 及び Armance を通し世界に心を完全に開いたこと、つまり自我解放を完成させたことによる幸福なのである。

第三章 結 論

これまで Octave の自我解放に至るプロセスをたどってきたのだが、このプロセスは M. Crouzet の言葉を用いるならば（私とは観点が異なるのだが）「Octave の死への上昇¹¹³⁾」を成しているであろう。すなわち、Octave と世界を隔てる障害が除去される過程は死へ向かっての階梯なのである。まず第一に、兵士との喧嘩によるけがは、それまで自己の内に閉込っていた Octave の目を外へと向けさせ、その目に愛の可能性を語らせ、Octave が Armance に恋愛感情を抱くのを可能にさせた。次に、決闘で瀕死の重傷を負うことにより、Octave は恋をしないという誓いを破り、Armance に愛の告白をすることができた。最後に、自殺という形式により、Octave はどうしても語り得なかった秘密の告白ができ、自我解放を完成させることができたのである。つまり、Octave の肉体の生命力が下降線を描くのととは反対に彼の意識は上昇線を描き、彼の死の瞬間においてそれが頂点に達するのである。Octave の死は彼と Armance の恋愛（彼の逆説）と、彼の自我解放を完成させているのである。

Octave は自己の不幸に絶望した時、Armance への愛を自覚し苦悩する時¹¹⁴⁾と、二度自殺願望を口にするが、この場合の自殺は、今問題にしている自殺とはその意味が異なる。願望された自殺は世界からの逃避という消極的意味しか持っていないのである。一方、実現された自殺は、Octave と世界の関係を物語っているのである。つまり、彼は結局は世界を完全には受け入れてはいないということ。確かに、Octave は Armance との恋愛を通し世界に対し心を開いてゆき、世界との関係が改善される。しかし、既に述べたように、Octave は singularité を死

の直前まで保持すること、¹¹⁵⁾ また、彼が自殺という形式によって自我解放を実現したことは、¹¹⁶⁾ 彼が世界から取込まれることを拒絶し、死によって世界との関係を超越したことの意味に他ならないのである。ここにおいて、彼の死は、Prévost の言う「安楽死¹¹⁷⁾」というよりはより積極的な意義付けが必要となるのである。Octave の死は他の Stendhal の登場人物の死、例えば、投獄されながら脱獄を拒否し、処刑死する Julien Sorel の死と程度の差はあれ、¹¹⁸⁾ 相同のものであり、また Julien Sorel によってその意味がより明確となるであろう。すなわち、Octave や Julien の置かれている閉塞状態は、J. Starobinski の言うように、¹¹⁹⁾ 決して逃走不可能なほど堅くは閉ざされていないのだが、作者が彼等に逃走よりも死を選択させるという点において、彼等の死¹²⁰⁾ は Stendhal 自身の世界に対する意識の問題をも提起しているのである。

最後に、Octave の享受する幸福の意識、及び幸福の観点から Octave と Stendhal の identité の問題を考察しよう。Armance と和解した時、Andilly の森での Armance との散歩の時、愛を告白する時、Armance を見つめる時、最後に、死の瞬間においてというように Octave は幸福を享受する。これらは、Octave が Armance 及び Armance を通し世界に向け自我解放したことの幸福であると同時に、Armance への愛情を通し彼女の世界との融合による幸福なのである。Octave の幸福の瞬間の密度は、彼と Armance との恋愛の成立度合に応じて、Armance との間の transparence が増してゆくことに並行して、つまり、彼の肉体の生命力が下降線を描くのととは逆に増してゆく。それは、決闘で瀕死の重傷を負った Octave に顕著に見てとれるであろう。そして、彼の幸福が頂点に達するのは、既に述べたように、初めて «son Armance¹²¹⁾» と言い、Octave が Armance を所有し、彼女と一体となっているように彼の死の瞬間においてなのである。Octave が最高の幸福を死の瞬間に生きるということが象徴的に示すように、ここからこの幸福を生きるための条件が導き出されてくるであろう。まず第一に、死が物語るように、「過去」「未来」への顧慮から切離された「現在」が意識において実現されねばならない。また、Stendhal は死への旅路に赴く直前の Octave を、Armance との結婚に反対する親族を説得する間、世界とは無縁な存在となった Octave を次のように提示する。¹²²⁾

A son grand étonnement, il observa [...] que rien ne lui était pénible ;
c'est que rien ne lui inspirait plus d'intérêt. *Il était mort au monde.* [...]

les hommes étaient pour lui des êtres d'une espèce étrangère. Rien ne pouvait l'émouvoir. (イタリック筆者)

つまり、彼の死は意識において上のように規定された死なのである。従って、意識における社会的な事柄からの離脱が第二の条件となるであろう。最後に、死と直面した Octave が Armance と一体となっていることが示すように、そこに激しい情念、想像力の発動が要求されるであろう。すなわち、最後の条件から明らかなように、また Starobinski がそれを指摘するのだが、¹²³⁾ Octave の幸福は amour-passion の実現された幸福なのである。そして、激しい情念、想像力の発動により幸福が実現されるという時、それはまた Octave の持つ独自性が幸福という点において実現されたことを意味しているのである。この特性を有する Octave を作者は、Armance の目を通し、不平不満を言う一方、彼のまなざしが Armance に愛の可能性を語りかける文脈において次のように描く。¹²⁴⁾

Elle, sans se le bien expliquer, sentait qu'Octave était la victime de cette sorte de sensibilité déraisonnable qui fait les hommes malheureux et dignes d'être aimés. Une imagination passionnée le portait à s'exagérer les bonheurs dont il ne pouvait jouir. (イタリック筆者)

引用した第二文について、S. Felman は、それを Octave の impuissance の «litote¹²⁵⁾», しかも彼の「厳密に医学的テーマを言い表すには、それについて語り過ぎる¹²⁶⁾」litote であるという。が、第一文もまた Octave の肉体的欠陥の litote を成しているし、必要以上に語られていることがより明確に理解できるだろう。なお、この一節全体が Armance の視点で語られていることに留意したい、またこのことがこの一節全体が litote である理由を説明しているであろう。Octave がその犠牲となっている激しい感受性は不幸、及び幸福（この感受性の持主が「愛されるにふさわしい」と言われる点において。そして、この幸福の実現は amour-passion の実現に他ならない）の支配的要因となっている。第二文において、激しい感受性の言い換えである激しい想像力（及び、誇張して考えるというその属性）により、「享受できない幸福を誇張して考える」（傍点筆者）と、Octave の不幸が敷衍されているのである。従って、次のように要約できる。Octave は過剰な感受性、想像力の持主であること（しかも、この魂の持主は «un cœur sec, froid, raisonnable¹²⁷⁾» すなわち «une âme commune¹²⁸⁾» の対極に位置付けられて

いるのである)。また、彼の性的不能は彼自身の特性によって、すなわち、それによって amour-passion が実現される «une puissance de passion et d'imagination¹²⁹⁾» によって条件付けられているのである。¹³⁰⁾

Stendhal は *Souvenirs d'Egotisme* において、Métilde のイメージの介入によって引き起こされた fiasco の体験を語っているのだが、¹³¹⁾ 続いて、Destutt de Tracy に初めて会い驚いた時の様子を彼は次のように語る。¹³²⁾

Jamais je n'ai été aussi surpris. J'adorais depuis douze ans l'*Idéologie* de cet homme [...] Il passa une heure avec moi. Je l'admirais tant que probablement je fis fiasco par excès d'amour. Jamais je n'ai moins songé à avoir de l'esprit ou à être agréable. (イタリック作者)

adorer, admirer, excès d'amour の結果として fiasco という言葉が用いられていること自体象徴的であろう。そしてこれら感情の高まりが、Stendhal 自身によって avoir de l'esprit や être agréable の対極に位置付けられているのである。この対比は Octave の une imagination passionnée と un cœur sec, froid, raisonnable との対比と相同なのである。あるいは、*Vie de Henry Brulard* では、「自分の人生がそれらによって要約される¹³³⁾」女性達のイニシャルを書く前後において、またこれら女性達との恋愛の関連において、Stendhal は自分の気質は Cabanis の言うメランコリック型なのだと言う。¹³⁴⁾

J'ai éprouvé absolument à cet égard tous les symptômes du tempérament mélancolique décrit par Cabanis¹³⁵⁾. J'ai eu très peu de succès.

そして、彼は、そのイニシャルを最初に書き、少年時代の初恋の対象であった女優 Kubly 夫人の姿を初めて見かけた時の様子を次のように語る(なお、Kubly 夫人はすべて代名詞で表わされている)。¹³⁶⁾

Je passais par la rue des Clercs à mes jours de grand courage; le cœur me battait; je serais peut-être tombé si je l'eusse rencontrée [...] Un matin, me promenant seul au bout de l'allée des grands marronniers au Jardin de Ville, et pensant à elle comme toujours, je l'aperçus à l'autre bout du jardin [...] Je faillis me trouver mal et, enfin, je pris la fuite, comme si le diable m'emportait [...] et j'eus le bonheur de n'en être pas aperçu. Notez qu'elle ne me connaissait en aucune façon. Voilà un des traits les plus marquants

de mon caractère, tel j'ai toujours été (même avant-hier). Le bonheur de la voir de près, à cinq ou six pas de distance, était trop grand, il me brûlait, et je fuyais cette brûlure, peine fort réelle. Cette singularité me porterait assez à croire que pour l'amour j'ai le tempérament mélancolique de Cabanis.
(イタリック作者, 下線筆者)

激しい感受性, 想像力がその頂点において, 激しい恐怖心, 羞恥心へと転移し, また本京は Kubly 夫人の姿を見ることは幸福であるはずのところ苦痛となっている点において,¹³⁷⁾ de Tracy との初対面の時以上に, ここにおいて Stendhal の特性が表われているであろう。これら Stendhal の自伝の断片の記述を通し次のことが浮かびあがるであろう。すなわち, 感情生活において, Stendhal 自身明確に自覚し, 少年時代から常に持ち続けていると主張する, 過剰な感受性, 想像力という彼の独自性が。

既に, Octave は激しい感受性, 想像力の持主であり, この特性が彼の肉体的欠陥を規定していると述べた。そして, Octave の独自性が, Stendhal が「これが私の性格のもっとも顕著な特色の一つであり, 私はいつもそうだった(一昨日でさえも)¹³⁸⁾」と述べる彼自身の独自性と相同であることが明確になった今, 次のように言えよう。Stendhal は Octave の性的不能を通して, 激しい感受性, 想像力という彼自身の存在の一恒常的特性(彼はそれを « *ma manière d'aller à la chasse du bonheur*¹³⁹⁾» または « *caractère*¹⁴⁰⁾» と呼ぶ)を表現している。Octave の肉体的欠陥は Stendhal の独自性が不幸という点において小説の内に転移された一表現であると。¹⁴¹⁾ 従って, Octave について, 「彼には, *une âme commune* だけが欠けていたのだ¹⁴²⁾」と語ることによって, 彼の魂を *âme sensible* に位置付ける Stendhal の意図が理解できるであろう。

Stendhal は自分の恋愛について次のように語る。「私は Cabanis が記述したメラノリックな気質のもつあらゆる徴候をそのまま実感した。私はごく少数の成功しか収めなかった¹⁴³⁾」と。このように, 彼はその特性の故に多くの不幸を体験しているのだが, 果して彼は Octave を通して幸福な自己を完全に実現しているであろうか。確かに, Octave は死の瞬間において激しい想像力の媒介による amour-passion の幸福を享受する。が, Octave と Armance との transparence は牢獄における Julien と Rênal 夫人とのそれより程度において劣り, また, Octave の死

も Julien のそれよりは程度において劣ると既に述べたように、Octave の幸福は相対的なものであった。この作品において、Stendhal は自己の存在の恒常的なあり方を幸福という点において完全には実現していないのである。それが完全に実現されるには *Le Rouge et le Noir* を待たねばならないのである。

註

1) テキストは次の版による。*Armance* in *Romans et Nouvelles de Stendhal*, t.1. édition établie et annotée par Henri Martineau, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1952.(以下 *Ar.* と略す)

2) *Ar.*, préface, p. 11. なお Octave の秘密とは、彼が性的不能者であることを指す。

3) Martineau はこの手紙を「それがないと *Armance* という物語は空白で一杯になってしまうだろう」(*ibid.*, préface, p. 14.) と評価し、重要視する。G. Genette の場合、より断定的である。«[...] ce roman constitue l'exemple peut-être unique dans toute la littérature d'œuvre à secret, dont la clef se trouve ailleurs: à savoir, dans une lettre à Mérimée et dans une note en marge d'un exemplaire personnel, qui affirment d'une manière formelle l'impuissance d'Octave.» (G. Genette, «Stendhal» in *Figures II*, Seuil, 1968, p. 173.)

4) *Ar.*, préface, p. 13.

5) *ibid.*, préface, p. 11. なお、彼は Classiques Garnier 版 *Armance* においても、これと同じ一文でもって序文を開始しており、序文の内容も Pléiade 版とほぼ同じである。(cf. *Armance*, Introduction d'H. Martineau, Classiques Garnier, 1950.)

6) *ibid.*, chap. XXIX. p. 175. Martineau は Octave のこの言葉を聞いて、*Armance* ばかりでなく(事実、彼女にはその意味が理解できない)、「前もって何も知らされていない読者も理解できない」(*ibid.*, préface, p. 16. 傍点筆者)と言うのだが。また、H.-F. Imbert は上記の Mérimée 宛の手紙を念頭におきつつ、«Et pourtant, si l'on fait le compte des manifestations du mal d'Octave, elles se révèlent vraiment peu concluantes!» (*Armance*, Préface d'H.-F. Imbert, Garnier-Flammarion, 1967, p. 12.) と言い、続けて、本文でも挙げた

« monstre »以外の Octave の impuissance の manifestation を例に挙げながらも, « Il n'en reste pas moins que ces divers éléments ne suffisent pas à orienter l'imagination du lecteur avec précision. » (*ibid.*, p. 12.) と言う。とりあえず以下に « monstre » に関する主要辞書の定義を挙げておこう。

Grand Larousse de la langue française: être organisé dont la conformation s'écarte du type de l'espèce par des anomalies importantes

Le Robert: individu de conformation insolite par excès, par défaut ou par position anormale des parties

Littré: corps organisé, animal, ou végétal qui présente une conformation insolite dans la totalité de ses parties, ou seulement dans quelques-unes d'entre elles.

- 7) *ibid.*, préface, p. 14.
- 8) J. Prévost, *La Création chez Stendhal*, Mercure de France, 1951, p.228.
- 9) *ibid.*, p. 228.
- 10) *ibid.*, p. 228.
- 11) H.-F. Imbert, *La Métamorphose de la liberté*, José Corti, 1967, pp. 379—380.
- 12) *Armance*, Préface d'A. Hoog, Coll. « folio », Gallimard, 1975, p.18.
- 13) *ibid.*, p. 21.
- 14) H.-F. Imbert, *op. cit.*, p. 381.
- 15) M. Bardèche の場合, より断定的である。« En 1826, Stendhal, préoccupé essentiellement de dresser le tableau de la société aristocratique en France, s'intéressant avant tout à la littérature satirique et descriptive, ne cherche dans le roman que le moyen de faire une peinture satirique des mœurs. » (Bardèche, *Stendhal Romancier*, La Table Ronde, 1947, p. 133.) Imbert や Bardèche の他に V. Brombert も同じ観点から作品解釈を試みている。(V. Brombert, *Stendhal, fiction and the themes of freedom*, the University of Chicago, 1968, pp. 55—56.)
- 16) H.-F. Imbert, *op. cit.*, p. 400. Bardèche と Brombert もまた同じ見解を示している。(Bardèche, *op. cit.*, p. 140. Brombert, *op. cit.*, p. 56.)
- 17) *ibid.*, p. 404.
- 18) ここで言う「世界」とは「諸関係の総体としての世界」という意味であり、

Prévost の言う「諸々の事柄の総体」と相同であろう。

- 19) Prévost, *op. cit.*, p. 228.
- 20) *Ar.*, chap. III. p. 47.
- 21) *ibid.*, chap. III. p. 47.
- 22) *ibid.*, chap. XV. p. 108.
- 23) *ibid.*, chap. I. p. 36.
- 24) *ibid.*, chap. I. p. 36.
- 25) 例えば, «Octave semblait misanthrope avant l'âge.» (*ibid.*, chap. I. p. 36.) と作者は言う。
- 26) 例えば, «J'ai par malheur un caractère singulier [...]» (*ibid.*, chap. I. p. 34.) と Octave 自身, 自己の singularité を自覚する。
- 27) 例えば, «Il aurait voulu passer quelques années dans un régiment, ensuite donner sa démission jusqu'à la première guerre qu'il lui était assez égal de faire comme lieutenant ou avec le grade de colonel. C'est un exemple des singularités qui le rendaient odieux aux hommes vulgaires.» (*ibid.*, chap. I. p. 29.) と作者は言う。
- 28) 例えば, Octave に向い母親は «tes idées singulières» (*ibid.*, chap. I. p. 35.) と言う。
- 29) 例えば, Octave に向い母親は «ce goût singulier» (*ibid.*, chap. I. p. 34.) と言う。
- 30) 例えば, «le mystère de cette rêverie profonde et souvent agitée» (*ibid.*, chap. I. p. 36.)。
- 31) 例えば, Octave は «une manière de sentir originale» (*ibid.*, chap. XXVIII. p. 169.) の持主であると父親に評される。
- 32) 作者は次のように言う。 «Peut-être quelque principe singulier, profondément empreint dans ce jeune cœur, et qui se trouvait en contradiction avec les événements de la vie réelle, tels qu'il les voyait se développer autour de lui [...]» (*ibid.*, chap. I. p. 30.)。そして, この principe singulier が Octave の意識の奥底において, 意識の表面に現われる彼の singularité を規定しているのである。
- 33) 例えば, «cette âme singulière» (*ibid.*, chap. I. p. 37.), «un être aussi fort et aussi singulier» (*ibid.*, chap. I. p. 37.) と, 母親に形容される。

- 34) なお, *Octave* の *singularité* に関して詳しくは次の論文を参照されたい。
Kosei Kurisu, « *Idée de la singularité dans *Armance* de Stendhal* » in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, N° 28, 1976.
- 35) H.-F. Imbert, *op. cit.*, p. 400.
- 36) *ibid.*, p. 414.
- 37) *Ar.*, chap. XXVIII. p. 169.
- 38) *ibid.*, chap. I. p. 36.
- 39) *ibid.*, chap. I. p. 30.
- 40) *ibid.*, chap. II. p. 42.
- 41) *ibid.*, chap. II. p. 43.
- 42) *ibid.*, chap. I. p. 32.
- 43) *ibid.*, chap. I. p. 35.
- 44) 「性格」は例えば, « *Cette jeune fille avait un caractère singulier* » (*ibid.*, chap. V. p. 56.) と言われる。

「感受性, 行動」は « [...] ce que l'oeil de la haine aurait pu découvrir de légèrement singulier dans sa manière d'être frappée des événements, et même dans sa conduite » (*ibid.*, chap. V. p. 57.) と言われる。

「容貌」は « *un singulier mélange de la beauté circassienne la plus pure et de quelques formes allemandes un peu trop prononcées* » (*ibid.*, chap. V. p. 58.) と言われる。

「まなざし」は « *un regard singulier* » (*ibid.*, chap. V. p. 58.) と表現される。

なお, *Armance* の *singularité* に関して詳しくは上掲の Kosei Kurisu, « *Idée de la singularité dans *Armance* de Stendhal* » in *Etudes de Langue et Littérature Françaises* や同氏の « *Armance, Mina de Vanghel, Mathilde de la Mole, Le thème de la singularité chez les héroïnes stendhaliennes* » in *Stendhal Club*, N° 74, 1977. を参照されたい。

- 45) *ibid.*, chap. V. p. 58.
- 46) Kosei Kurisu, « *Idée de la singularité dans *Armance* de Stendhal* » in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, N° 28, 1976, p. 42.
- 47) *ibid.*, pp. 42-43. 栗須氏は *analogie* によりと言うのだが, 具体的に言えば, 天使への比喩の他に, *singulière* と形容される *Armance* の現実に対する態度は

Octave と軌を一にする。例えば、作者は、Armance が18才になるかならないうちに多くの不幸を体験したためだと言い、次のように述べる。《C'est pour cela peut-être que les petits événements de la vie semblaient glisser sur son âme sans parvenir à l'émouvoir. Quelquefois il n'était pas impossible de lire dans ses yeux qu'elle pouvait être vivement affectée, mais on voyait que rien de vulgaire ne parviendrait à la toucher》(ibid., chap. V. p. 56.).

- 48) G. Mouillaud, *Le Rouge et le Noir, le roman possible*, Larousse, 1973, p. 79.
- 49) *Ar.*, chap. XV. p. 108.
- 50) *ibid.*, chap. XV. p. 108.
- 51) *ibid.*, chap. III. p. 47.
- 52) *ibid.*, chap. III. p. 48.
- 53) *ibid.*, chap. IV. p. 52.
- 54) *ibid.*, chap. IV. p. 53.
- 55) *ibid.*, chap. IV. p. 53.
- 56) *ibid.*, chap. V. p. 54.
- 57) *ibid.*, chap. V. p. 55.
- 58) *ibid.*, chap. V. p. 55.
- 59) *ibid.*, chap. V. p. 55.
- 60) *ibid.*, chap. V. p. 55.
- 61) *ibid.*, chap. V. p. 55.
- 62) *ibid.*, chap. V. p. 62.
- 63) *ibid.*, chap. IV. p. 52.
- 64) *ibid.*, chap. VI. p. 68.
- 65) *ibid.*, chap. VI. p. 69.
- 66) *ibid.*, chap. VII. p. 71.
- 67) *ibid.*, chap. VII. p. 71.
- 68) *ibid.*, chap. VII. p. 71.
- 69) *ibid.*, chap. VII. p. 71.
- 70) *ibid.*, chap. VII. p. 70.
- 71) *ibid.*, chap. VII. p. 75. この Octave の反応に対し、二人の関係を明らかにするために、Armance のそれをより詳しく検討してみよう。彼女が Octave へ

の愛情を « mon fatal secret », « mon fatal amour » と呼ぶこと自体意味があるのだが、愛を自覚した時、彼女は次のように考える。 « Il faut élever une barrière éternelle entre Octave et moi. Il faut me faire religieuse, je choisirai l'ordre qui laisse le plus de solitude, un couvent situé au milieu de montagnes élevées [...] Là jamais je n'entendrai parler de lui. » (*ibid.*, chap. VII. p. 71.)
 あるいは « cette passion affreuse » は次の文脈において用いられる。 « L'aimais-je donc sans le savoir ? l'ai-je toujours aimé ? Ah, il faut arracher de mon cœur cette passion affreuse. » (*ibid.*, chap. VII. p. 71.) 二人の反応を比べるなら、Armance は Octave の分身という関係が明らかになるであろう。むしろ、Octave を意識のレベルの存在とするなら、Armance は彼の無意識のレベルの分身と言えるであろう。なぜなら、上の Armance の反応は、形こそ異なるにせよ、Octave が Armance への愛を自覚し、葛藤に苦しむ時の反応であるからだ。

72) *ibid.*, chap. IX. p. 80.

73) *ibid.*, chap. IX. p. 81.

74) *ibid.*, chap. IX. p. 82.

75) *ibid.*, chap. XIII. p. 99.

76) *ibid.*, chap. IX. p. 82.

77) *ibid.*, chap. IX. p. 81.

78) *ibid.*, chap. IX. p. 81.

79) *ibid.*, chap. IX. p. 81.

80) *ibid.*, chap. IX. p. 81.

81) *ibid.*, chap. IX. pp. 81–82. また、他の箇所において、Octave はそれまでの彼と世界の間を、雨の降る中をカサもささずに歩き、天候に腹を立てる人間に自分をたとえている。« [...] au lieu de prendre un parapluie, je m'irritais follement contre l'état du ciel, et [...] je m'imaginai que la pluie tombait exprès pour me jouer un mauvais tour. » (*ibid.*, chap. X. p. 84.)

82) *ibid.*, chap. XIII. p. 99.

83) *ibid.*, chap. XIII. p. 99.

84) *ibid.*, chap. XIII. p. 99.

85) *ibid.*, chap. IX. p. 81.

86) Kosei Kurisu, *op. cit.*, pp. 33–34.

87) *Ar.*, chap. XVI. p. 109.

- 88) *ibid.*, chap. XVI. p. 109.
- 89) *ibid.*, chap. XVI. p. 109.
- 90) *ibid.*, chap. XVI. p. 109.
- 91) *ibid.*, chap. XVI. pp. 110–111.
- 92) *ibid.*, chap. XVI. p. 112.
- 93) この時、Octave は逆に、世界が自分にとって閉ざされたと感じるのである。
 « Le monde désormais était fermé pour lui. » (*ibid.*, chap. XVII. p. 112.) つ
 まり, singulier と形容される彼と世界の関係が一時的にせよ復活する。
- 94) *ibid.*, chap. XXI. p. 134.
- 95) *ibid.*, chap. XXIII. p. 140. Octave の告白を Armance は、彼の愛を、
 « amitié » (*ibid.*, chap. XXIII. p. 141.) と呼び、また彼の傷が癒えた場合、絶
 対に結婚の話をしないならという条件でもって、受け入れる。これに対し、Oc-
 tave は « Quelle étrange condition ! » (*ibid.*, chap. XXIII. p. 141.) と言いな
 がらも、Armance の提案を受け入れる。この Armance の反応を見るならば
 彼女が Octave の無意識の願望を実現している点において、彼女が Octave の無
 意識のレベルの彼の分身であるという性格がより明確になったであろう。
- 96) *ibid.*, chap. XXIII. p. 143.
- 97) *ibid.*, chap. XXIII. p. 143.
- 98) *ibid.*, chap. XXIII. pp. 143 et 144.
- 99) *ibid.*, chap. XXIII. p. 144.
- 100) *ibid.*, chap. XXIX. p. 173.
- 101) *ibid.*, chap. XXIV. p. 149.
- 102) *ibid.*, chap. XXIV. pp. 150–151.
- 103) J.-P. Richard, « Connaissance et Tendresse chez Stendhal » in *Littérature
et Sensation*, Seuil, 1954, pp. 60–61.
- 104) *Ar.*, chap. XXIV. p. 153.
- 105) *ibid.*, chap. XXIX. p. 172.
- 106) *ibid.*, chap. XXIX. p. 173.
- 107) *ibid.*, chap. XXIX. p. 174. Octave は他の箇所で秘密を、« cette parole
 fatale » (*ibid.*, chap. XXIX. p. 177.) と言い換えている。
- 108) *ibid.*, chap. XXIX. p. 175. Armance はこの言葉を殺人者 « un assassin »
 (*ibid.*, chap. XXIX. pp. 176 et 177.) の意味に、« monstre » を sens figuré

のレベルで理解する。Octave が自己の *impuissance* をそうとは言わずに *«monstre»* と言い、性的不能を意味する *«monstre»* が、登場人物からさえも両義的に解されたことにより、彼の性的不能は両義性を獲得する。そして、彼の性的不能を中心に、テキストは両義性を獲得するのである。

109) H.-F. Imbert や S. Felman は Octave の自殺の主なる動機を偽手紙による Armance の裏切りに求めている (H.-F. Imbert, *La Métamorphose de la liberté*, José Corti, 1967, p. 440. S. Felman, *La «folie» dans l'oeuvre romanesque de Stendhal*, José Corti, 1971, p. 153.)。確かに、手紙を読んだ Octave が *«Je me suis trompé; il ne me reste qu'à mourir»* (Ar., chap. XXX. p. 183.) と反応し、筋の展開を見る限り、Armance の裏切りが彼の自殺の直接因となっており、Imbert が *«Suicide d'amour»* (op. cit., p. 440.) と定義することは納得できるかもしれない。だが、この偽手紙のエピソードが、Octave の告白の失敗の後に位置付けられていることを考慮に入れるならば、Armance の裏切り (それが真実であれ、そうでないにせよ) は、Octave がそれを信じたという点において、彼の無意識の願望が実現したものと言えないであろうか。

110) Ar., chap. XXXI. p. 189.

111) G. Mouillaud, op. cit., p. 146.

112) *ibid.*, p. 146. Mouillaud は牢獄内の Julien Sorel と Rênal 夫人との関係に關して、*«Sans feinte aucune»* とともに、この言葉を用いているのだが、transparence については、死の場面における Octave と Armance の関係にあてはめられるであろう。確かに、Octave は自分の死が自殺であることについては沈黙を守っているのだが、彼の死を聞いた Armance の反応を、*«Le genre de sa mort ne fut soupçonné en France que de la seule Armance»* (*ibid.*, chap. XXXI. p. 189.) と作者が書く時、二人の間に成立している暗黙の了解が示唆されていないだろうか。いずれにせよ、transparence と言っても、Octave と、Armance との transparence は Julien と Rênal 夫人とのそれよりは程度の異なる、より明確に言えば、程度の劣る transparence なのである。従って、*«Sans feinte aucune»* は Octave と Armance には留保しなければならないのである。

113) M. Crouzet, *«Le Réel dans Armance, Passion et société ou le cas d'Octave: étude et essai d'interprétation»* in *Le Réel et le Texte*, A. Colin, 1974, p. 93. Crouzet は、性的不能者でありながら恋に陥る Octave の Armance への罪の償いの過程という視点から、この言葉を用いている。

- 114) *Ar.*, chap. XVII. p. 115, et chap. SVIII. p. 118.
- 115) 具体的に言えば、Octave の最後の *singularité* は、死の直前彼が遺書をしたためる際に現われる。《*Il laissait tout ce dont il pouvait disposer à sa femme, sous la condition bizarre qu'elle se remarierait dans les vingt mois qui suivraient son décès.*》(*ibid.*, chap. XXXI. p. 189. イタリアック筆者)
- 116) Felman は Octave の自殺を、「彼の *différence* を解消するために」と言う (S. Felman, *op. cit.*, p. 209.)。しかし、Octave が死の直前まで *singularité* を所有し、死の瞬間において自我解放を完成させたことそれ自体、Octave の自己実現を、彼の *différence* の実現を意味しているものであり、Felman の指摘は適切さを欠いていると言えるであろう。
- 117) J. Prévost, *op. cit.*, pp. 260 et 363. 但し、Prévost は Octave ばかりでなく、Julien, Fabrice の死をも「安楽死」と呼ぶ。
- 118) Octave の死後 Armance は修道院に入るが、Julien の死後 Rênal 夫人は三日後に死ぬという点において。つまり、Julien は自分の死に Rênal 夫人を巻込んでいるが、Octave はそうでないという点において程度が異なる。
- 119) J. Starobinski, « Stendhal Pseudonyme » in *L'Œil vivant*, Gallimard, 1961, p. 199.
- 120) 既に、117) で述べたように、Prévost は、Octave, Julien, Fabrice 達の死を「安楽死」と名付け、三人の死を相同なものとしなしている。また、Mouillaud は、登場人物達の死を Stendhal の世界観との関連において考察することの重要性を次のように語る。《[...] Que cette fin, dans les trois romans achevés de Stendhal, soit la mort du héros, n'est pas nécessairement impliqué par les lois du genre. Il faudra la rattacher à d'autres aspects de la vision stendhalienne du monde, au refus de mener jusqu'au bout la transformation des personnages, de « peut-être » au « n'était-ce que cela? », de l'errance à la rentrée dans la norme. » (Mouillaud, *op. cit.*, p. 73.) Mouillaud もまた、三人の死を同格に扱っている。一方、私が、本論において特に Stendhal の世界に対する意識の問題との関連において、Fabrice の死を除外したのは、彼の死が他の二人の死とその意味が異なると考えるからである。死の意味の相違については、後の機会に述べたいと思う。
- 121) *Ar.*, chap. XXXI. p. 189.
- 122) *ibid.*, chap. XXXI. p. 187.

123) J. Starobinski, *op. cit.*, p. 200.

124) *Ar.*, chap. III. p. 48. なお, Felman は指摘していないのだが, この一節は Octave の不幸という点において両義的である。喧嘩で傷ついた Octave は Armance に次のように言い, 不平不満を言い終える。◀ Ah! si le ciel m'avait fait le fils d'un fabricant de draps, j'aurais travaillé au comptoir dès l'âge de seize ans [...] j'aurais moins d'orgueil et plus de bonheur... Ah! que je me déplaïs à moi-même!... ▶ (*ibid.*, chap. III. p. 48.) 過剰な感受性による不幸とは, Octave が自分の不幸は貴族の一員として生まれたことにあり, 貴族であることへの強いうぬぼれにあると考えること, 及び貴族であることへの彼の抱く激しい嫌悪感に対応する。また, 享受できない幸福を誇張して考える不幸とは, ブルジョア階級に生まれたら, 何と幸福であろうと彼が考える点に対応する。そして, 本文で引用した一節に続いて, 作者は Armance の目を通し次のように言う。◀ S'il eût reçu du ciel un cœur sec, froid, raisonnable, avec tous les avantages qu'il réunissait d'ailleurs, il eût pu être fort heureux. Il ne lui manquait qu'une âme commune. ▶ (*ibid.*, chap. III. p. 48.) もし, Octave がほかに持っている多くの長所と合わせて, ◀ un cœur sec, froid, raisonnable ▶ を, すなわち, ◀ une âme commune ▶ さえ持ち合わせていたなら, 何も思い迷うことなく貴族であることの幸福を享受できるであろうにと。Octave の不幸のもう一つの意味は, 言うまでもなく, 彼の性的不能に根差す不幸である。

125) S. Felman, *op. cit.*, p. 170.

126) *ibid.*, p. 170. 但し, 「必要以上のこと」と言う場合, Felman には amour-passion の視点が欠落している。

127) *Ar.*, chap. III. p. 48.

128) *ibid.*, chap. III. p. 48.

129) Felman, *op. cit.*, p. 171.

130) Stendhal は *De l'amour* の Des fiasco という章において, amour-passion の只中にある男が fiasco に陥る様を次のように語る。◀ Pour peu que vous ayez de passion pour une femme, ou que votre imagination ne soit pas épuisée, si elle a la maladresse de vous dire un soir, d'un air tendre et interdit: Venez demain à midi, je ne recevrai personne, par agitation nerveuse vous ne dormirez pas de nuit: l'on se figure de mille manières le bonheur qui nous attend; la matinée est un supplice; enfin, l'heure sonne, et il semble que

chaque coup de l'horloge vous retentit dans la diaphragme. Vous vous
acheminez vers la rue avec une palpitation; vous n'avez pas la force de faire un
pas. Vous apercevez derrière sa jalousie la femme que vous aimez; vous
montez en vous faisant courage. . . et vous faites le *fiasco d'imagination*. »
(Stendhal, *De l'amour*, texte établi par H. Martineau, Classiques Garnier,
1959, p. 337. イタリック作者, 下線筆者) これは, Octave の性的不能が激しい
情念, 想像力によって規定されている点と相同である。想像力を媒介とする
amour-passion において, 幸福と不幸は相対立する関係にあるのではなく, むし
ろ表裏一体の関係にあることが理解できるであろうし, Octave の性的不能の
litote がこのことを顕著に示しているであろう。Imbert は, Octave の問題に関
して, *De l'amour* の *Des fiasco* に言及することは, « ce guépier de la critique
stendhalienne » に陥ることだと言う (Armance, Préface d'H.-F. Imbert, Garnier-
Flammarion, 1967, p. 13.)。果してそうだろうか。重要なのは, Stendhal が
いかなる文脈において問題を論じているかを見極めることなのである。

131) *Souvenirs d'Egotisme*, in *Oeuvres Complètes de Stendhal*, Cercle du Biblio-
phile, 1970, chap. III. p. 29.

132) *ibid.*, chap. IV. p. 33.

133) *Vie de Henry Brulard*, in *Oeuvres Complètes de Stendhal*, Cercle du
Bibliophile, 1968, t.I. chap. II. p. 19.

134) *ibid.*, t.I. chap. II. p. 19.

135) Cabanis はその著書 *Rapports du physique et du moral de l'homme* の,
Sixième mémoire; De l'influence des tempéraments sur la formation des
idées et des affections morales において, le tempérament mélancolique につ
いて次のように記述する。 « [...] Chez le mélancolique, des mouvements
gênés produisent des déterminations pleines d'hésitation et de réserve: *les*
sentiments sont réfléchis, les volontés, ne semblent aller à leur but que par des
détours. Ainsi, les appétits, ou les désirs du mélancolique, prendront plutôt le
caractère de la passion que celui de besoin; souvent même le but véritable
semblera totalement perdu de vue: L'impulsion sera donnée avec force pour
un objet, elle se dirigera vers un objet tout différent. C'est ainsi, par exemple,
que l'amour, qui est toujours une affaire sérieuse pour le mélancolique, peut
prendre chez lui mille formes diverses qui le dénaturent, et devenir entière-

ment méconnaissable pour des yeux qui ne sont pas familiarisés à le suivre dans ses métamorphoses [...] » (Cabanis, *Rapports du physique et du moral de l'homme*, Charpentier, 1855, t.I. p. 331. イタリック筆者) Cabanis の記述から判断するなら、メランコリック型気質の人間は、「感情が屈折し」、「欲望が欲求よりも情念という形を取り」、「恋愛が多く形の取り得る」という点において、過剰な感受性、想像力の持主であると言えるであろう。

136) *Vie de Henry Brulard*, t.II. chap. XXIV. pp. 59–61. この少年 Henri Beyle が Kubly 夫人の姿を見かけた時の彼の内面の動揺と、上述の *De l'amour* において、*« Vous faites le fiasco d'imagination »* と言われた男の愛人に会いに行く時のそれは amour-passion が不幸な結果に終る点において相同である。なお、Stendhal はこの引用の終りにて、「恋愛に関しては(……)」と語っているのだが、既に de Tracy との初対面の時の例でもみたように、Stendhal のこの特性は尊敬し、熱愛する人々の前に出た時の彼に共通のものなのである。彼は自伝において次のように語るであろう。 *« [...] Ces trois hommes ont possédé toute mon estime et tout mon cœur, autant que le respect et la différence d'âge pouvaient admettre ces communications qui font qu'on aime. Même j'étais avec eux, comme je fus plus tard avec les êtres que j'ai trop aimés, muet, immobile, stupide, peu aimable et quelquefois offensant à force de dévouement et d'absence du moi. Mon amour-propre, mon intérêt, mon moi avaient disparu en présence de la personne aimée, j'étais transformé en elle. »* (*Vie de Henry Brulard*, t.I. chap. II. p. 29. イタリック作者) そして、彼の特性は、ある場合、すなわち、愛する女性の前に立つ時、Kubly 夫人を見かけた場面が示すように、激しい恐怖心、羞恥心の形をとって現われるのである。

137) それはまた Octave の特性でもある。Armance に裏切られたと信じ、死を決意した Octave は、彼女の前に立った自己を、すなわち、羞恥心のため愛想の良くなかった自己、彼女に対し恐怖を感じた自己を次のように回顧する。*« [...] Je n'étais pas fait pour plaire à ce que je respecte. Apparemment qu'une timidité malheureuse me rend triste, peu aimable, quand je désire passionnément de plaire. Armance m'a toujours fait peur. Je ne l'ai jamais approchée sans sentir que je paraissais devant le maître de ma destinée. »* (*Ar.*, chap. XXX. p. 186. イタリック筆者) Octave が Armance に対して抱いた恐怖心は

両義的である。つまり、愛する女性の前に立つ時の恐れ、また、性的不能者でありながら Octave がそうとは意識しないうちに彼の愛情の対象となった、「自分の運命の主人」となった Armance への恐れと。Felman は後者を ≪ l'angoisse de l'impuissance ≫ (*op. cit.*, p. 172.) と呼ぶ。

138) *Vie de Henry Brulard*, t.II. chap. XXIV. p. 59.

139) *ibid.*, t.I. chap. III. p. 44.

140) *ibid.*, t.II. chap. XXXV. p. 232.

141) Octave の性的不能と Stendhal の identité を問題にする時、Imbert は、Stendhal がその自家本である Bucci 本に書き込んだ次のようなノートにその論の根拠を求めている。≪ The 7 octobre 1826 he (=Stendhal) was very near of pistolet [...] Je (=Stendhal) quitte cet ouvrage par la nécessaire impuiss of making. Repris comme remède le 17 septembre 1826 [...] ≫ (*Ar.*, notes et variantes, p. 1427.) Stendhal には 1826 年に愛人 Clémentine Curial (Stendhal は Menti と呼ぶ) との決定的な別れがあり、絶望のあまり彼は自殺を考える程であった。その絶望のため、しばしば *Armance* の執筆を中断したのだが、彼は失恋の痛手を癒すため執筆を再開した、ということを上ノノートは意味している。ここから、Imbert は、「*Armance* の執筆は彼 (= Stendhal) にとって精神の均衡を見出す手段であったことは認められた事実である」から、「事実の内にとどまろう」と言い、次のように主張する。「女にはねつけられた Stendhal と、[女を]受け入れることのできない Octave との間の差違は少なくとも Stendhal の絶望が続く間に消滅していた。(……) Stendhal は、そうとは意識していなかったかのように [Octave の] 生理的なテーマを、このうえなく苦痛な愛の夢に転化していたのである」(*Armance*, Préface d'H.-F. Imbert, Garnier-Flammarion, 1967, p. 10 et p. 13.)。また、Brombert は Imbert の挙げた「事実」について「絶望が執筆の再開の直接因となったかもしれない。しかし、Stendhal の個人的な苦悩は作品の主題と諸テーマにとって、奇妙にも外的なままである。Stendhal の個人的関心事と主人公の苦悩との間に、適当な融合あるいは照応ができあがったようには思われない」と言いながら、彼は次のように結論を下す。「彼 (= Stendhal) はその主人公に、個人的な強烈に残っている思い出や、性的不能の若い主人公に特有の苦悩には根差していない、[失恋による] 絶望を転移させている」(Brombert, *op. cit.*, p. 53.)。確かに、Imbert の言うように、Stendhal 自身のノートが示すように、失恋の傷を癒やすためとい

う執筆の動機は認められよう。また、例えば、失恋で傷ついた Stendhal が Ar-mance への愛を自覚し自殺を願望する程苦しむ Octave になって自己同一化していることは、彼自身のノートから明らかである。《*Tout ceci me rappelle Menti en 1827 après le Chantilly de 1826*》(Ar., notes et variantes, p. 1451.). (但し、注意しなければならないのは、1827 年という年号が示すように、これら Stendhal のノートは出版された彼自身の著書に書き込まれているという事実である。つまり、Stendhal 自身に関するノートは、執筆時の回想、あるいは、自己の作品を読むことによって想起させられた思い出であって、1826 年執筆時の彼を正確に反映しているとは必ずしも言い難いのである。特に、後者に関しては。) このように、執筆時の Stendhal の不幸と、作品内の Octave の不幸が並行していたことは明らかであるし、Stendhal が Octave に自己同一化していることは容易に推測できる。Imbert は、Stendhal が Octave と不幸という点において並行関係にあったことに着目し、そして、Stendhal が Octave に同一化している状況を確認することによって、結論を導いているのである。しかし、Imbert の結論にせよ、Brombert (彼は作者と主人公の並行関係を否定し、上のような結論をその根拠を明らかにせず下すのだが) のそれにせよ、彼等はあまりにも表面的な問題に把われ過ぎている。問題をより深く掘下げる必要があるだろう。Stendhal が自己の意識のいかなるレベルにおいて、作中人物との同一化を示しているのかという問題が取り残されているのである。本論の最後において試みているのは、Octave の性的不能の両義性、及びそれを中心としたテキストの両義性に着目することによる、この問題の解明なのである。

142) Ar., chap. III. p. 48.

143) *Vie de Henry Brulard*, t.I. chap. II. p. 19.